

議 事 録

第1回 岐阜市幼児教育推進プラン検討委員会

- 1 日 時 令和元年6月26日（水）18時00分～20時00分
- 2 場 所 岐阜市中央青少年会館
- 3 出席者 大塚委員、春日委員、加納(顯)委員、加納(誠司)委員、真田委員、白木委員、
杉山委員、鈴木委員、中島委員、西川委員（※安藤委員、脇淵委員ご欠席）
- 4 臨時オブザーバー ベネッセ教育総合研究所 所長 谷山 和成氏
- 5 傍 聴 0名（※公開で開催）
- 6 次 第
 - (1) 開 会
 - (2) 事務局あいさつ
 - (3) 事務局説明
 - (4) 委員あいさつ
 - (5) 委員長及び副委員長の選任
 - (6) 委員長あいさつ
 - (7) 幼児期の家庭教育調査に関する話題提供
 - (8) 委員協議
 - (9) 閉 会
- 7 議 事
(18時00分開会)

○事務局 では、定刻となりましたので、ただいまから第1回岐阜市幼児教育推進プラン検討委員会を開会します。司会を務めます幼児教育課長の久保田です。どうぞよろしくお願いいたします。

まず、机上に本日付にて委員をお願いする辞令書をお配りさせていただいております。今年度末までの任期となりますので、よろしくお願いいたします。

本日は委員10名が出席いただいております。脇淵委員、安藤委員におかれましてはご欠席となります。よろしくお願いいたします。

また、臨時オブザーバーとして、ベネッセ教育総合研究所所長の谷山和成様にご出席い

いただいております。先に、ご挨拶をいただいておりますので進めたいと思います。

○谷山臨時オブザーバー 委員の中に、私どもの研究所の乳幼児の領域に関する主任研究員の真田が参画しております。ベネッセ教育総合研究所では、これまで、数多くの研究レポートを世の中に届けさせていただいておりますので、今日は、議論の入り口としてご報告させていただき用意をいたしました。私も同席をさせていただいて、この委員会において、皆さんで何をディスカッションして深めていくのかを、ぜひ一緒にさせていただきたいと思い、無理にオブザーバーをお願いした次第でございます。本日の会議だけになりますが、どうぞよろしくお願い申し上げます。

○事務局 本日の会議は公開で行います。なお、岐阜市の子ども未来部から、川瀬子ども未来部次長兼子ども政策課長が出席しております。

ここで資料の確認をさせていただきます。先日、郵送させていただいた資料に加えて、机上に、真田委員からご報告いただくスライドの資料、それから、委員名簿の差し替え版、本年度の会議予定案、また、委員の皆様からお預かりした資料を机上に配らせていただいております。

では、ここで事務局より挨拶をさせていただきます。教育委員会事務局政策参与兼次長の原からご挨拶申し上げます。

○事務局（原教育委員会事務局政策参与兼次長） 教育委員会事務局の原と申します。本日はご出席いただきましてありがとうございます。まず、このような大変遅い時間の設定になりまして、誠に申し訳ございません。特に、小さいお子さんがおられる方もお見えで、大変ご無理申し上げました。お詫び申し上げます。

ここからは幼児教育の現状ということになりますが、まず、平成29年3月に幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領、そして、小学校の学習指導要領が改定されたということで、いずれの施設においても幼児教育を充実させるとともに、幼児期の教育で育まれた資質や能力を踏まえて小学校の教育活動を実施するとの方向性が示されたところだと認識しております。

岐阜市でも出産から子どもの巣立ちまで切れ目なく支援をし、安全・安心を確保しながら幼児期の教育を充実させていきたいと考えております。これは、私どもの柴橋市長が、

就任して1年半ほどになりますが、「こどもファースト」と申し上げてきておりまして、その考えのもと、本年度から教育委員会に幼児教育課を設置いたしまして、幼児期からの教育を充実するために、庁内体制を整えてスタートしたところでございます。

岐阜市では、岐阜市幼児教育振興指針を平成16年度に策定して推進してまいりましたが、大変年月も経過したといったことで、このたび新体制のもとで、これだけの見識のある方にお集まりいただきましたので、これを改定して幼児教育の重要性を広く認識し、市長もよく申し上げている「オール岐阜」で取り組めるよう、総合的な推進を図りたいと考えております。

最後になりますが、プラン策定に当たりまして、委員の皆様の各専門分野からのご意見やご指導を賜りましてよりよいものにしていきたいと考えておりますので、本日から長期間になりますが、ご議論をよろしくお願い申し上げます。

○事務局 では、委員の皆様の自己紹介の前に、今回お集まりいただいた本会議の趣旨や、市の幼児教育に関する現状などについて、幼児教育課主幹兼幼児教育推進係長の松岡からご説明申し上げます。

○事務局（松岡幼児教育課主幹兼幼児教育推進係長） （資料1について説明）

○事務局 では、引き続き、委員の皆様から自己紹介を兼ねましてご挨拶を頂戴したく存じます。名簿の順番でお願いしてもよろしいでしょうか。大塚委員からお願いいたします。

○大塚委員 臨床心理士の大塚知子と申します。私は、スクールカウンセラーとして岐阜市内の4つの中学校区にお邪魔しています。中学校区なので、中学校と小学校にお邪魔していて、幼稚園と直接の関係はありませんが、ここ3年ほどで、小学校1年生の保護者の方の相談が増えていると感じています。その中でも、幼稚園のときに、幼児支援教室を利用してみえて、「ちょっとうちの子、小学校でやっていけるかどうか心配で。」とのご相談で、4・5月の早い時期にお見えになる方が増えているという印象があります。

幼児支援教室を卒園後も、相談機関から学校への情報提供をしっかりとなされていたり、良好な相談関係が早期から築かれていたりすると感じていて、岐阜市の早期療育が行き届いているいいところだなと思っています。

ただ、外国籍の子が小学校に入って初めて集団生活を行っていたり、言葉や文化の違いもあって学校でなかなか適応しにくかったりというのを目の当たりにして、大きな課題かなと思っています。

幼児教育に関する理念や期待について、私は個人的に、社会的弱者と見られるお子さんや保護者の方と関わることが多いので、やはり、人への優しさや寛容さが子どもたちの中に育てていければかなと思っています。その大前提は、子どもたち自身の自己肯定感を育むことかなと思っています。

○春日委員 岐阜大学教育学部の春日と申します。よろしくお願いします。

私の研究分野は、一般的に子ども発達学と言っておりますが、発育発達学と、データをしっかり取って分析する測定評価学という健康系の分野です。細かい研究内容については、ホームページなどを見ていただくなどして調べていただければ出てくると思います。

ご存じの方もみえますが、私の実家が私立の幼稚園で2園あります。岐阜市には、はなぞの幼稚園があって、そこの理事長もやっております。あと、岐阜大学に岐阜大学保育園ほへみがあります。そこを立ち上げて欲しいと頼まれて以来、これまで12年ほど園長もやっております。事業所内保育園としては、岐阜市では初めて立ち上げさせていただき、2年前に認可も得ました。私は、実際にそういう現場を見ながら、保護者がどこにニーズを抱いているのかを考えています。岐阜大学保育園は、95人の0～1歳の専用施設にしていますが、今年もやはり0歳の枠が足りない状況です。柴橋市長が言われる「オール岐阜」が、保護者目線なのか、それも大事だし、あとは、子どもの保育・教育的な目線も大事だと思っています。バランスのとれたところを模索しながら考えていければと思っています。よろしくお願いします。

○加納（顯）委員 岐阜市私立幼稚園連合会の会長の加納です。よろしくお願いいたします。

私は、学校法人加納学園の理事長をしておりまして、加納学園内に幼稚園が3園ございます。こばと幼稚園、こばと西幼稚園、こばと第3幼稚園の3園と、近年、小規模保育園を設けており、こちらも3園ございます。

岐阜市私立幼稚園連合会ですが、岐阜市内の加盟園が36園で、そのうちの3園が認定こども園で、内2園が幼保連携型、1園が幼稚園型です。全国的に見ると、もう既に3・4割ぐら

いが、認定こども園に移行している状況で、岐阜市の場合は、私学助成の幼稚園と我々は言っていますが、私学助成の幼稚園のままで幼児教育をされているところが非常に多いということです。認定こども園もございしますが、全て学校法人でございまして、学校法人というのは創業者が教育の理想を掲げて実現するために私財をはたいて設立したといった経緯があります。教育の理想のことを建学の精神と言っていますが、我々の学校法人の私立幼稚園の一番大切な部分であると思っております。

私立幼稚園は県の管轄ですので、幼少連携を考える上でこれが1つの壁になる部分もあって、岐阜市教育委員会の教育長との懇談の中で、岐阜市との連携協定という話が出てきて、今年の3月27日に、岐阜市長と岐阜市私立幼稚園連合会との間で連携協定を結ばせていただきました。幼少連携がスムーズにいくための体制が整ったということで、子どもたちにとっていいことだなと思っています。

長くなりましたので、私の教育についての話は割愛させていただきます。よろしくお願いいたします。

○加納（誠）委員 愛知教育大学の加納と申します。

もともと私は、愛知県で小中学校の義務教育の学校の教員をしておりまして、研究者に転身してこれで13年目になります。愛知教育大学は現在5年目で、その前任校が、岐阜県各務原市の中部学院大学で8年間お世話になりました。専門は教科教育で、生活科を中心にやっています。中部学院大学で勤めたときに、これはまた目からうろこといいでしょうか、幼児教育・保育に関する上司・先輩がたくさんいまして、そこでかなりもんでいただき、大変勉強になりました。怒られるかもしれませんが、教育というのは氷山の一角で、そのベースには保育・幼児教育があって、更にベースには福祉のようなものがあるということを学ばせていただいたと思います。これまで、保育者養成に関する授業をたくさんやらせていただきまして、特に中部学院大学での最後の年は、幼稚園の教育実習の関連授業を多数担当して、岐阜市私立幼稚園連合会様にも大変お世話になりまして、鍛えていただいた一環かなと思います。

今、新しい教育課程で学校教育がこれから変わろうとしているわけですが、そのキーワードの一つがアクティブラーニングだと思います。当初、文部科学省は、小・中・高・大学をアクティブラーニングにしようと言っていました。そこに幼稚園が後から入ったわけですが、それはしようがないなと思っています。なぜかというと、幼稚園、保育園・保育

所、認定こども園はもともとアクティブで、結局どうということかなと思いますが、幼児のあのきらきらした目を小・中・高とつなげて、大学が一番課題だと思うのですが、つなげていくことが大事だと理解しています。その一端で、この検討委員会にもお声がけいただき、そこの接続部分の大事にしていること、今まで自分が学んできたことをもって、ぜひ尽力していきたいなと思っている所存です。皆さん、どうかよろしくをお願いします。

○真田委員 ベネッセ教育総合研究所の真田でございます。

なぜベネッセがと思われる方もいらっしゃるかなと思ひまして、少しだけご紹介させていただきます。ベネッセ教育総合研究所は1980年に教育研究所として設立されました。それ以来、ベネッセグループ傘下のシンクタンクとしてさまざまな教育や子育てに関する研究を行ってまいりました。岐阜市とは2016年に包括研究の協定を結び、その後、岐阜市の英語教育に関わる市の職員の方が、東京のベネッセ教育総合研究所の英語研究チームに研究・研修のため3年間派遣され、お互いの専門性をもとに学び合っただけでそれぞれの仕事に生かしたり、あるいは岐阜の中学校の教育実践の質を高めるため、タブレット教材を利用した共同研究を行ったりしてまいりました。

幼児教育の領域では、昨年度末に、幼稚園、保育園、認定こども園にお子様を通う保護者の方を対象にした調査を、岐阜市と共同で実施いたしました。委員の方には園長先生もいらっしゃいますので、この調査にご協力いただいた皆様、ありがとうございました。後ほどその調査結果を一部ご報告いたします。

私自身は研究所で十数年ほど乳幼児の保護者や、あとは保育・幼児教育にかかわる調査研究を行ってまいりました。その中で、乳幼児期の育ちの重要性や環境の重要性を知ったり、あるいは人が育つことの原点は、保育・幼児教育にあるのではないかと奥深さを感じたり、少しでも乳幼児のよりよい育ちにつながる仕事ができればと思っております。委員としての活動を通して岐阜の子どもたちに思いを寄せて、未来を生きる子どもたちに大人として何がバトンタッチできるか、皆様と一緒に考えてまいりたいと思ひます。どうぞよろしくお願ひいたします。

○白木委員 岐阜市の小中学校校長会から参りました岩小学校の校長の白木と申します。

私は昨年度まで、岐阜市の南西部にあります且格小学校で教頭をしておりました。そのときに、大分前から、近くのひきえ子ども園さんとの連携はあったのですが、校区から少

し離れたところにある私立幼稚園とも連携をしようということで、いろいろと調整をしておりました。同じ且格小学校に通う1年生が学習をスムーズにできるように、さらに保護者の皆様もお互いが仲よくなって1年生を迎えられるように、2年前から調整を始めて授業参観にお互いが出向いたり、小学校の職員も幼稚園に行って授業を見たり、または授業に参加したりということを考えてやってまいりました。

それというのも、以前、私が美濃加茂市に勤めておりましたときは、小規模の小学校でしたが、隣に保育園がありまして、小学校入学前に、保育士さんと一緒に、朝の挨拶活動から給食の時間まで見学に行くといったことが日常的に行われていました。小規模の学校だからできた部分もあるかと思いますが、入学前から子どもたちの名前も知っていて入学するというような、ただ、小1プロブレムを起こさない、スムーズに小学校に入学できるようにということやってまいりました。

今回、校長として岩小学校に赴任したところ、本当にありがたいことに、泣いて学校に行きたくないとか、そういう子がいないのです。このごろわかったのですが、今、岐阜県では「あったかい言葉かけ運動」というものを進めていまして、その言葉を保護者や地域の皆様によかったら書いてくださいということで提案しましたところ、ある子のお母さんからお手紙をいただきました。以前、お子さんが、毎日学校に行くのが嫌だといって泣いていたそうです。実は、大きな犬のいる地域のおうちがあつて、そのおうちの方が「大丈夫だよ、大丈夫だよ」と言ってくださったり、見守り隊の方も学校まで泣いている子を学校に着くころには笑顔で登校できるようにずっと支えてくださっていたりということで、お母様が大変うれしいお手紙をくださったのです。

全小学校がコミュニティ・スクールですので、そうしたコミュニティ・スクールのいろいろな立場の方を、保護者の方や子どもたちを支えてくださる方として、そういったあたりもぜひと思っています。大塚委員が、子どもたちの自己肯定感を高めたいということをおっしゃっていましたが、私もやはり就労が増えている保護者の方をサポートできるのは地域のおじいちゃんやおばあちゃんであつたりするのではないかと思いますので、そのあたりも大事にして進めていきたいなということを日々感じています。

○杉山委員 岐阜市立加納幼稚園の園長の杉山でございます。

昨年度から岐阜県公立幼稚園・こども園長会の会長もさせていただいております。そういった中で、岐阜県内の様々な地域の実情なども交流し合っているところですので、この

委員会の中で他の市町の状況などもお伝えできればと思っております。

また、現場にいる頃は、公立幼稚園の中にことばの教室がありまして、担当を長くやっておりました。そして、岐阜市に子ども・若者総合支援センター“エールぎふ”ができたときにはそちらへ行きまして、ことばの教室が今は幼児支援教室と言っているのですが、その担当をさせていただいておりました。

ちょうど一昨年に幼稚園教育要領が改定されたのですが、その前の改定の10年前には、岐阜県の教育委員会に2年間おりました。要領が改定されたということで、県として幼児教育のアクションプランをつくろうということで事業に携わりましたが、そのころからやはり小1プロブレムといったことが課題になっていました。そのときに、それまで幼児と児童の連携ということで交流活動はされているのですが、なかなかそこから一步踏み込んでいけないというようなことが話題になっていて、連携から接続へ変わっていくことが大事だといった方向性になっていきました。幼児の現場というのは、公立や私立の別もありますし、幼稚園や保育所、今では認定こども園もあります。事務局からの説明にありましたように、岐阜市の小学校でも10園以上の多様な幼児教育施設から入学してくるという現状がありまして、加納(顯)委員がおっしゃっていたように、私立幼稚園は県で所轄されていますし、公立はそれぞれの市町でというようなところがあり様々です。なかなかそこが連携していきにくいところがありました。また、児童と幼児の交流というと、やはりその校区が一番やりやすいので、近隣のところでやっていくとなると、実際にはその学校に進まない子も活動をしていくこととなります。ただ、それは就学する学校でなければならないことはないと思います。では、どうしたらいいかを考えると、やはり教員同士がしっかりと子どもの発達を理解して、うまく接続させていくことが大事だと思っておりました。

そんなときに、教育委員会が核となって、私立であろうと、公立であろうと、保育所であろうと、幼稚園であろうと、1つにまとめていくことが大事だということを、県にいたときもアクションプランの中で示していました。そういう点では、今回、岐阜市に幼児教育課ができたことは、岐阜市の幼児教育がより充実していくのではないかと思いますし、岐阜市の公立幼稚園は2園しかないのですが、幼児教育課と両輪となって、今度は現場で実践していくところに力をつけていきたいと考えております。

本日も、ちょうど研究保育をやりまして、近隣の小学校の先生にも見ていただきました。今回の幼稚園教育要領の改定でいえば、幼稚園教育において育みたい資質・能力が明確化されたことと、幼児期の終わりまでに育ってほしい姿が明確に10項目示されたのですが、

これを小学校の教師と共有して連携を図り、小学校教育との円滑な接続を図るということを狙いとして改定されたと示されています。そのことは、幼児教育課の施策の3本柱の一つでもありますので、充実していくとよいと思いますし、自分たちも力を注いでいきたいと思っております。よろしくお願いいたします。

○鈴木委員 岐阜市立幼稚園PTA連絡協議会の副会長の鈴木悦子と申します。どうぞよろしくお願いいたします。

私には2人の娘がおりまして、上の子も加納幼稚園でお世話になりまして、今は小学校3年生です。下の子が今、年長で加納幼稚園でお世話になっております。

私はもともと、美濃加茂市が実家でして、こちらに嫁いできて、どのような園があるのかに興味があって調べさせていただいたら、岐阜市にはすごく多くの幼児施設があっぴっくりしました。いろいろ見させていただいたら、それぞれ特色のある園があっぴ、いろんなところにそれぞれ力を入れられているなということを感じました。

先ほどもお話にあったように、10園以上の園の子が1つの小学校に入学するというところで私も驚いたのですが、それぞれ特色のある園の子たちが一緒になって勉強していくというところで、友達関係は子どもなのでどんどんでき上がっていくとは思っています。日々の生活とか、どういう生活をしていたかというところで、また小1プロブレムという言葉もありますが、そういうところが少しでもスムーズにいくためには、いろんな園の横のつながりというのもすごく大事だと感じてきました。

今回、この4月から岐阜市に幼児教育課ができると聞いて、横のつながりができるのかなと考えていました。そういうことが実現されて、市内の幼児施設の横のつながりが子どもに良い影響を与えていったらいいなと感じています。そのような幼児教育推進プラン検討委員会に参加させていただきだけでも緊張していますが、すごくうれしいことだと思って参加させていただきます。どうぞよろしくお願いいたします。

○中島委員 私は、NPO法人グッドライフ・サポートセンターで事務局長をしている中島です。よろしくお願いいたします。

自己紹介ということで、まず、私は岐阜市に生まれ、岐阜市に育ち、夫を引っ張り込んで子育てをし、今もなお岐阜市に育っているという岐阜っ子です。この岐阜で、私にとっては、ほんとうに楽しく子育てをさせていただきました。それを今度は、若い世代の人た

ちに、岐阜市で楽しみながら子育てをしてほしいという思いで今も活動をしています。もともと私立幼稚園の教員をしておりまして、その後、子育てをして、自分の子どもだけでは飽き足らず、NPO法人を立ち上げて、たくさんのお子さんたちを見させていただいています。それから、今は教え子たちが親世代なので、若いお父さん、お母さんたちがすごくかわいくて、今はお父さん、お母さんたちの支えになればいいなと考えています。そして、子どもたちが、健康に岐阜市で育ってくれたらいいなという思いで活動を続けています。

自己紹介なので、2年前まで8年間、岐阜市の教育委員をさせていただきまして、岐阜市の教育に関しても逆に学びをたくさんいただきました。子どもたちは、上の娘は育ち、ひとり暮らしをし、社会人です。下の娘は、今は就職活動中で、昨日、内定をいただき大変うれしいです。そういう母親としての今までの歴史もありますので、お母さんたちに少しでも何か伝えられたらいいなと思いながら、一緒に悩める支援者であったらいいなと思って活動を展開しています。

私のここでの役目は、家庭教育が重点になるのかなと考えています。先ほど、子どもの自己肯定感ということをおっしゃられましたけど、それを育むのは母親であり、父親であり、家庭教育の中で育まれていくので、まずは母親であり、父親が自分を肯定するという意識を持って子育てを楽しんでもらいたいと思います。私どもが今進めているのが、BPプログラムという、生後2か月から5か月の第1子を持つママと赤ちゃんの講座を展開しています。一番、鬱になったり孤独になったりしがちな時期なので、一歩外へ出ていただいて、子育て中のお母さんたちとつながっていただき、いろんな情報を持って帰ってもらうプログラムも推進しながら、指導できる者を一生懸命育てているところです。

あと、岐阜市のこども未来部から、ぎふファミリー・サポート・センター事業も受けさせていただいて、今年で19年目になります。その現状からお話すると、岐阜市は活動も多ければ、依頼会員の数もすごく多い地域です。なので、県内の交流会のときには岐阜市とは規模が違うと言われてしまうのですが、それぐらい件数が多く、国からも問い合わせがあるくらいの市です。今は社会復帰される、育休から明けられるお母さんたちも大変多くて、大体12月ぐらいからお問い合わせが始まり、5月の連休明けぐらいには登録が落ちつくのですが、今は7月まで登録がいっぱいです。やはり核家族が増えてきて、職場復帰するお母さんたちが多く、それから、転勤族の方が多いのが岐阜市の特徴だと感じています。なので、お母さんたち、お父さんたち、そして、子どもたちが支えられるように、教育という現場でいえば、家庭教育のところで意見が言えたらいいなと思っています。

幼児という言葉ですが、乳児からスタートしているので、乳幼児期に、どうやって子どもたちが育ち、親と一緒に育っていけるかが大切です。親も、実は親1年生、2年生になっていくので、一緒に育ち合える、そんなプランができたらいいと思っています。よろしくお願いします。

○西川委員 岐阜聖徳学園大学の西川でございます。保育専修のほうに所属しています。

私も、小学校の教員が振り出しでございまして、小学校の教員を13年、その後、国立大学の附属幼稚園で教員と副園長をやりまして10年、そして、研究者となって13年ということで、気がつけば40年近く教育で、気がつけば3人の祖父となっております。

そんな中で、私がなぜ幼児教育の研究者になったかという、やはり小と幼というのを渡り歩いたのが大きくて、幼稚園の遊びに、ダイナミックで何とアカデミックな営みだろうと感動して、これはもっと深めたいなということを思いました。ですから、私は附属幼稚園の時代も含めて20年以上、遊びの中の学びというのを徹底的に研究してきました。今、よく学びに向かう力は遊び込むことだと言われますが、20年前から注目して取り組んできたわけです。

突き詰めていくと、どうしても小学校の学びにつなげていくことが必要なので、これも20年近くなのですが、幼少連携の研究を附属幼稚園で始めました。それから、今でも少し関わっているのですが、滋賀県をフィールドにしたり、岐阜では、平成24年からこれまで、大垣市で学区ごとに幼少連携のモデル地区を決めて研究をしたりしています。やはり、遊びの中で紡がれた学びが、小学校の教科学習の中でどのように発揮されていくかがすごく大事で、その成果について、今年は岐阜市で3回ほど、講演・講義させていただくことになりました。

また、幼児教育に携わる先生方が子どもたちの遊び込むというものを支える保育・教育を実践できる能力が必要だと考え、今年で9年目になりますが、私が個人的に勉強会を立ち上げて、月1回、年12回、土曜の会という保育実践を語る会を開催しています。昨年を見ますと、年間延べ600名が参加する大研究集団になりまして、その中で学んでいかれた先生方が育っていらっしゃるというのが今すごく楽しみです。

ですから、遊びの中の学びというものをもっと明確に出していき、それを小学校へつなげていくことと、遊び切る、遊び込む子どもを育てるための学部生も含めた保育者養成が私の基本になっています。ある程度、幼児教育の本質にかかわる部分でいろいろとご意見

を述べさせていただけたらありがたいなという気持ちで臨んでおります。どうぞよろしく
お願いいたします。

○事務局 ありがとうございます。それでは、続きまして、委員会規則第4条の規定に基づいて、委員長及び副委員長を皆様の互選にて選任したく存じます。恐れ入りますが、事務局からのご提案でもよろしいでしょうか。

(「異議なし」の声あり)

○事務局 では、委員長には加納誠司委員を、副委員長には白木明美委員をお願いしたく存じますが、いかがでしょうか。

(拍 手)

○事務局 では、委員長を加納誠司委員に、副委員長を白木明美委員をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。では、ここからの進行は、加納委員長をお願いしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○加納(誠)委員長 ただいま委員長の重責を仰せつかりました加納です。すごいメンバーがそろっている中で、なぜ私が委員長なのかを考えながら、皆さんの自己紹介を聞いていたのですが、多分、僕だったらみんなが言いやすいのかなと思いました。僕はどちらかというと、研究のフィールドは小・中学校が多いので、皆さんの専門や経験をたくさん出していただきながら進めたいと思います。これまで、岐阜の小・中学校にも若干かかわらせていただいて、自分で言うのも恥ずかしいのですが、素晴らしいです。先生方はとても力があるなと思っています。でも、課題もあります。それが、この幼児教育からつながったら最強じゃないのかなと思っています。このプランが、絵に描いた餅にならないということは、事務局の熱量からすごく伝わってきましたので、とはいえ、実効的な餅も絵に描かないといけないなと思っていますので、ここで皆さんの本音を出し合ってデザインしていきたいという所存であります。よろしく申し上げます。

それでは、早速次第に沿って進めてまいります。幼児期の家庭教育調査に関する話題提

供として、真田委員からご報告のほうをよろしく申し上げます。

○真田委員 お手元にカラーの資料がございますので、これに沿ってご報告させていただきます。

岐阜市幼児教育課の3つの柱、先ほどご紹介がありました幼保小の接続、家庭教育の応援、あと、実践研究の推進、いずれも子どもが育つ環境の変化を踏まえたものである必要があります。そこで、話題提供といたしまして私からは2点ご報告いたします。

まず、子どもたちが育つ環境について、過去から今、そして、未来に向けた変化の予測、次に、その変化の中でよりよい未来をつくるために子どもたちに求められる力は何かということ。全国的なマクロの動向と岐阜市の地域の実情、後者については昨年度末に岐阜市と共同で実施した調査の結果をもとにご報告いたします。今後、委員会で協議していくに当たっての共通理解の出発点となる材料になればと思いますので、よろしくお願いいたします。

まず、資料をめくっていただきまして、3ページ、初めに岐阜市の調査の概要からお話しいたします。

対象は市内の幼稚園、保育所、私立認定こども園に通う幼児を持つ保護者です。通常、ベネッセの調査は謝礼ありで回収率が20%程度です。今回は謝礼なしということもありまして約10%でした。年度末のお忙しい中、それでも900名を超える方が回答してくださったこと、また、園の先生方が各ご家庭に調査協力の後押しをしてくださったことに感謝申し上げます。回収率を考えますと、この調査結果は岐阜市の全体的な傾向というよりは、調査に協力してくださった保護者の意見と捉えるほうが適切かなとは思いますが、今後の参考になるデータも多くありますので、ぜひご活用ください。

また、これと同じ時期に全国の幼児の保護者にも同様の内容で調査を実施しました。全体を通して岐阜市の調査結果とほぼ同様だったのですが、幾つかの項目では岐阜市調査のほうが全国よりもやや高いものがありましたので、初めにトピックとして2つご紹介させていただきます。

1つ目が4ページ、子育てに向き合う意識です。子育ての楽しさや自信などの前向きな気持ちについては全国調査よりもやや高く、逆に不安や負担感などはやや低く、全体的にポジティブな傾向が見られました。子育てへの前向きな気持ちはよりよい養育行動のベースにもなります。親が子育てを楽しめるような支援というのは引き続き推進するとともに、

もう一方にある不安や負担感、特にそれらを強く感じやすい親をどう見つけ、どう支えていくかということも家庭教育の応援をするに当たっては考えていくべき課題かなと感じます。

2つ目のトピックは5ページになりますが、絵本や本の読み聞かせです。岐阜市の調査では約3割の幼児の家庭がほとんど毎日読み聞かせをしているという結果で、週3日以上比率を全国調査と比較しますと、特に保育園児の家庭において全国調査よりも約10ポイント高いという傾向が見られました。読み聞かせは親子のコミュニケーションとしてとても大事な時間であり、忙しい中でもそうした時間を確保している家庭が多いのかなと思いました。岐阜市には立派な図書館もあるというふうにも伺っております。そうした環境による影響もあるのかなというのも後でぜひお聞かせいただければと思います。

そして、ここからが本題になります。6ページです。子どもが育つ環境の変化、まず過去からの変化について全国的な傾向と岐阜市の実情をお話いたします。

7ページをごらんください。こちらが家庭教育支援を行う上で参考になるデータになるかと思えます。こちらはベネッセが行った全国調査の結果です。自分の子どもが生まれるまでに赤ちゃんに接したことがある乳幼児の親は約半数です。少子化の中で子育ての知恵やスキルを身につけないまま親になって、手探りで子育てせざるを得ない今の親の姿が浮かび上がります。また、出産年齢の上昇によって同じ乳幼児の親であっても親子ほどに年齢の幅が広がっています。親が育ってきた環境や価値観が多様であるということも支援をする側の難しさにつながることもあるかもしれません。

また、3つ目は未就園児を持つ母親が例えば子育て支援センターに行くことなどを通して同じくらいの年の子どもがいる人と話をする機会がどれくらいあるかと尋ねたものです。赤字で示す約13%は年に数日以下、ほとんどこうした機会がないようです。この中にひょっとすると子育ての悩みを話し合うような相手を持たず、孤独に子育てをしている母親が含まれているかもしれません。

そして、もう一つの大きな変化が母親の就労率の増加です。先ほど、岐阜市の調査結果でもありましたが、8ページをごらんください。働く母親が増え、低年齢からの保育園などの利用率がここ数年で急激に増加する傾向があります。育児と仕事の両立に奮闘する母親が増えている中、父親の育児参加をいかに増やしていくかということも課題だと思いますし、低年齢からの保育の利用率が高まっているということを考えると、乳児保育、乳児期の保育の充実というところも1つ大きな課題になってくるかというふうに考えます。

次に、9ページです。親の生活の変化は子どもの生活にも影響を与えます。こちらは首都圏の調査ですが、この20年間で幼児が朝、園に向けて家を出る時間は早くなって、家に帰る時間は遅くなっています。全体的に保育園児が増えているというだけでなく、1日の中で園で過ごす時間も幼稚園児、保育園児ともに長くなっています。子どもの生活の中で園の存在感が大きくなっていると考えられます。

そして、10ページ、左のグラフは幼児が園以外で平日によく遊ぶ相手を示したものです。これも20年間の変化をあらわしています。一番上の、母親が大きく増える一方、下から4つ目の友達というのが20年間で56.1%から27.3%にほぼ半減しています。背景として少子化や保育園の通園率の増加などが考えられますが、以前はよく見かけた、園から帰ってきて地域の友達と遊ぶというようなことが最近では減っています。こうした幼児の生活実態を踏まえると、子どもが、子ども集団の中で育つ経験を園が意図的に仕掛けていく必要があるのではないかと感じます。

そして、右側は母親に尋ねた子育てやしつけの情報源です。保育園児の母親では第1位、幼稚園児の母親でも第2位が園の先生でした。現代の社会においては、園というのは子どもが育つということと親がさまざまな子育ての情報を得ながら親として育つということの両方に対して大きな役割を担っているのではないかと思います。幼保小の接続を考えるに当たっては、接続期だけに注目するのではなく、やはりその接続期につながる幼児期、そこにつながる乳児期、その乳児期からの一貫性、連続性とそれぞれの時期での保育の質の維持、向上というのがやはり必要になってくるのではないかと感じます。

11ページ、ここからは幾つか岐阜市の状況をお話いたします。こちらは母親の就業状況です。幼稚園というと専業主婦の家庭の子どもが通うものという印象がありましたが、今回の岐阜市の調査では幼稚園児の家庭の約半数は母親が働いているという結果になりました。働く母親と専業主婦がほぼ半々という中で、保護者への情報発信や保護者の園への参画のあり方などを模索している幼稚園も全国的には増えていると感じています。

その下の12ページは母親に園への期待を尋ねたものです。左のほうにございます家庭ではできない体験ができる。集団生活のルールを教えてくれる。社会性が身につく。生活習慣が身につく。また、5つ目には園での子どもの様子がわかる。これも7割以上と高い傾向がありました。親にとっては、園の保育をいかに見える化するかが親から園に期待することの1つであるのかなと感じております。

次に、13ページに移りまして、こちらは園からのさまざまな情報がどの程度子育ての参

考になっているかを尋ねたものです。日常的な送迎時の先生との会話や園内の掲示物、保育参観や保育参加、園便りなど、いずれも母親の子育ての参考になっていることがわかります。こうした情報が、子育ての参考になっていると感じる母親のほうが子どもに対してよりよい養育行動をとっているということも別の調査では明らかになっております。

また、現場ではまだ全国的には園から保護者への情報発信は実際に会って対面か、あるいは紙の媒体を中心としたものが多いように感じますが、例えば今後はICTなどを活用して、忙しい母親でも、あるいは園に来る機会が少ない父親でも、園での子どもの様子や園の保育の考えがわかるような、そういう情報発信のあり方というものもあるのではないかと感じております。

14ページです。園生活を通して母親は、当然子どもの成長を強く実感しているわけですが、実は子どもの成長を感じるだけでなく、親としての自分自身の成長も感じているということを示すデータです。園生活を通して子どものよさや得意なことに気がついた、子どもへの関わり方が分かったなど、いずれも8割から9割と高いことがわかりました。園の役割が増しているといっても、園が子育てを肩代わりするわけではなく、子どもや子育てについて親に教え、励まし、ともに悩み、子どもの成長を喜び合う、そういう子育てのパートナーになれるのではないかと感じます。

15・16ページには、岐阜市の調査をもとに園生活を通して感じた子どもの成長、あるいは親自身の成長をエピソードとして自由記述の中から抜粋しておりますので、こちらもぜひお時間があるときにお目通しいただければと思います。

17ページになりますが、これらの全国調査の結果、あるいは岐阜市の調査結果から見えてくることとして、現代の幼児の生活は、家庭と園を中心としたものになってきていると言えます。乳幼児期の親子を支えるために、家庭教育の支援と園の保育・幼児教育の充実は、やはり両輪として必要であると感じます。

18ページからは、子どもが生きる未来に向けた変化の予測のお話です。

19ページに、いきなりクイズですと書いているのですが、ここには答えを載せておりませんが、これは何の数字だかお分かりでしょうか。84.1%、これは2017年生まれの子どもたちの将来に関するある予測値です。頭の中で思い浮かべていただければと思いますが、正解は3番、22世紀生存率です。2017年生まれの子どもたちの8割以上が22世紀を生きる。最大でこれくらいの可能性があるかとベネッセでは試算しています。

では、その22世紀、未来の社会はどうなるか。20ページに示すように、日本の人口は約

半分に減ることが予測されています。高齢化が一層進んで労働力人口も減ってきます。これから子どもたちが生きる時代というのは非常に大きな挑戦の時代になります。私たち大人にできることは、子どもたちに、この変化を前向きに楽しむマインドとこの変化に挑む武器となる力を育てていくことではないかなと考えます。

その未来の社会は、変化の速度も速くなると考えられます。21ページをご覧ください。これは、各項目が5,000万人のユーザーを獲得するまでの期間をあらわしております。例えば、ラジオが全世界に5,000万人のユーザーを獲得するまでにかかった時間は38年ですが、フェイスブックは半年で5,000万人を達成しています。テクノロジーの進歩は、人間の成長をはるかにしのぐスピードであるとも言われます。さらに人工知能、AIの普及やグローバル化が進んでいることは日常生活のいろいろな場面で既に感じる事かと思えます。これからは、こうしたテクノロジーなどもうまく使っていく力を、子どもだけでなく大人も身につけていく必要があるかなと感じます。

そして、グローバル化と関連して、世界には解決したいさまざまな課題が山積しています。22ページに示しておりますのはSDGs、2030年に向けて世界が合意した持続可能な社会を実現するための17の目標です。国際連合のサミットで採択されたものであり、日本でも取り組まれています。貧困、飢餓、エネルギー問題など、いずれも1つの国では解決が難しいものばかりです。これからの子どもたちは、価値観や文化や言語が異なる多能な人たちと協働して、こうした世界的な課題に取り組んでいかなければならないと考えます。こうした時代の変化の中で求められる力とはどのようなものなのでしょう。また、それを幼児期にどう育むことができるか、そして、それを児童期以降にどうつないでいくか。

24ページはOECDのラーニングコンパスです。岐阜市でもコンパス・キューブをつくられているかと思いますが、2030年という近未来に、子どもたちに求められるコンピテンシーをまとめたものです。不確実で予測が困難な社会を切り開くための力として、ここでは新たな価値を創造する力、対立やジレンマを克服する力、責任ある行動をとる力の3つが示されています。これらは、いわゆる非認知的スキルと言われるものと関わる力であって、こうした力が自分や他者、地球全体のウェルビーイングをもたらすと考えられています。

日本でも、もう皆様のご存じのように、こうした社会の変化や世界の動向を踏まえて教育制度改革が行われています。25ページになります。子どもたちに育成すべき資質、能力として乳幼児期から高等教育までを貫く3つの柱が掲げられています。知識・技能、思考力・判断力・表現力、そして、学びに向かう力・人間性、このうち学びに向かう力が非認知的

スキルと言われるものであり、先ほど、OECDのラーニングコンパスで示された力とも関わるものです。今回の教育制度改革のポイントの1つであり、ベネッセでもこれまで研究を進めてきたものになります。この目には見えない力が、小学校入学以降に学びに向き合う力になるだけでなく、その後の人生の幸福や成功にまでつながっているということが、海外の研究からもわかってきました。ここについてはベネッセの研究もありますので、後で少しご報告いたします。

そして、この教育制度改革の中では、こちらもご存じのように、幼稚園、保育所、認定こども園の要領・指針なども改定されています。そのポイントを2つまとめてみました。1つ目が縦のつながりの強化、小学校以上への接続です。ここが強化されている背景としては、現在、幼保小接続が十分うまくいっていないという課題に加えて、幼児教育の成果をしっかりと小学校以上に引き継いでいこうという、その必要性が増しているということがあります。また、2つ目、横のつながりですが、今回の要領・指針の改定では、幼稚園、保育所、認定こども園の幼児教育に関する記載が共通化されています。この背景には、子どもたちが通う園が3元化、幼稚園、保育園、認定こども園と3元化する中で、どの園に子どもが通ったとしても、共通に一定の内容・水準以上の幼児教育を受けられるようにという願いが込められています。

そして、この2つの課題に対して取り入れられたのが先ほどご紹介した3つの資質、能力であり、その力が発揮された5歳児修了の姿としての、27ページにございます、いわゆる10の姿と言われる幼児期の終わりまでに育ててほしい姿です。一つ一つは細かくご紹介はいたしません、ここで示すような10の姿が、園にとっては子どもが育っていく方向性の指針となり、保育を振り返ったり、改善していきやすくなるものですし、小学校に対しては入学時点での子どもの姿として、これをイメージすることで指導のあり方に生かしてほしいという意図もあります。ご存じのように、小学校の学習指導要領ではスタートカリキュラムがもう義務化されていて、この10の姿を踏まえた指導を工夫することが示されています。幼保小接続に当たっては、この共通言語となる10の姿をいかに活用していくかということも、1つの取り組むべきポイントだと感じています。

では、次に、この10の姿、どうしたら子どもたちの姿をここに近づけていくことができるのかですが、この10の姿の中には学びに向かう力も含まれておりますので、その学びに向かう力について少しご説明させていただきます。

28ページです。学びに向かう力は目には見えにくい力、粘り強さや行動、感情のコント

ロール、協調性などの力を指しています。従来のテストで測る読み書き計算とは異なる力で、非認知的スキルとも呼ばれています。ベネッセの研究では、5つのカテゴリーに分類しています。「好奇心」、「協調性」、「がんばる力」、「自己抑制」、これが行動や感情のコントロール、自分がやりたいと思っても人の嫌がることは我慢できるなどのものです。あとは、「自己主張」、人に自分の気持ちを伝えたり、相手の意見を聞いたりすることができるなどのものです。こうした学びに向かう力を幼児期から育てていくことが重要だと言われている中で、では、それをどう育むかが重要になります。

ベネッセの調査結果では、家庭においては、親が子どもの意欲を尊重する態度が子どもの「がんばる力」などの学びに向かう力を育てるということがわかっています。子どもの意欲を尊重する態度とは、具体的には子どもがやりたいことを尊重して支援するとか、どんなことでも、まず子どもの気持ちを受けとめるなどの関わりです。

岐阜市の調査でも、家庭に対してそうした関わりをどの程度しているかを尋ねております。29ページになります。岐阜市の調査でも、これは全国調査とほぼ同様の傾向でしたが、母親の7割から9割ぐらいは、子どもに対してそういう態度をとっているという結果でした。

一方、園での経験としては何が大切でしょうか。ベネッセの研究では遊び込む経験が大事であるということが分かっています。遊び込む経験とは、その子らしく自由に主体性を発揮して夢中になるような遊びのことを指しています。こちらも岐阜市の調査で、あくまで母親の視点から見たものになりますが、子どもの園での遊び込む経験を尋ねています。全体的に高い傾向が見られる一方で、全国調査と同様の傾向ではありますが、上2つの項目に比べるとやや低かったのが下の2つ、挑戦的な活動に取り組むとか、見通しを持って遊びに取り組むといったものでした。子どもの発達段階にもよりますが、こうした経験も子どもの育ちにつながるものとして検討されてもいいのではないかと感じます。

こうして幼児期に育んだ学びに向かう力は、子どもたちが大人になって困難な課題に直面したときにもそれを前向きに受けとめて解決していく力になっていくと考えられます。幼保小接続といっても決して小学校教育を前倒しするのではなく、あくまで遊びの中での学びを充実させていく中で、認知的スキルも非認知的スキルも身につけていくことを、現場の先生だけでなく、保護者にも理解してもらうことが、やはり必要なのかなと感じております。

この遊びについては、私は子どもの権利という視点からも捉えたいと感じております。それが31ページです。遊び込む経験は未来の子どもの力のために必要であるというだけで

なく、むしろそれ以上に子どもの今を尊重する。言いかえれば、子どもの権利を保障するためにも大切であると思います。この子どもの権利条約が、国際連合で採択されてから今年でちょうど30周年、日本で批准して25周年、岐阜市でも2006年に岐阜市子どもの権利に関する条例が制定されていると伺っています。こうしたものも、今後、子どもを支援したり、幼児教育の充実を進める活動に生かしたりするのではないかと思います、ここでご紹介させていただきました。

そして、32ページですが、子どもの遊びを大切に子ども主体の保育をしている園ではどんなことをしているか、キーワードを幾つか並べました。これはちょっと時間がかかってしまいそうですので、また改めて機会があったらお話しさせていただきたいなと思って、今日は割愛いたします。

33ページは、いよいよ小学校への接続というところに向けた調査結果です。このようにして幼児期に育てた力を小学校にどうつないでいくかが次の課題となるわけです。幼保小接続にはさまざまな側面がありますが、岐阜市の調査では家庭に対する調査でしたので、入学に向けた親子、子の気持ち、また、家庭での取り組みを尋ねています。最後に幾つかトピックをご報告させていただきたいと思います。

まず、右上のグラフですが、これはお子様が小学校への入学をどれぐらい楽しみにしているかを聞いたものです。子どもの年齢ごとに、年少、年中、年長児とありますが、調査を実施した時期は2月です。年長児の約9割は小学校入学を楽しみにしているのです。とはいえ、子どもですので揺れる気持ちがあるということも想像できます。まずは、やはり子どもが、小学校に対して安心感と前向きな気持ちを持てるようなサポートが大切かと思えます。

次に、左下のグラフですが、これは子どもと小学校との交流の有無について年長児の母親に尋ねた結果を示しています。お子様がそういう交流活動をしたことがあるかとお尋ねしたところ、8割はしたことがあると答えています。したことがない、あるいはわからないという回答も22%程度ありました。岐阜市の小学校対象の調査では、全ての小学校が交流をしているという回答でしたから、園の情報発信が届いていないのか、それともほんとうに交流がないのか、交流があった日にお休みをしてしまったのか、ちょっとそのあたりは分からないのですが、保護者への周知という点で、ひよっとするとまだできることもあるのかなと感じたりしております。

次に、右下のグラフは、交流したことがあると回答した母親にその内容を尋ねたもので

す。交流の内容としては母親が認識しているものになりますが、小学生と一緒に活動するというのが7割、見学や授業参観が5割、それ以外は1・2割といった回答でした。先ほど委員の先生方からも、交流から一歩進めるというようなお話もありました。ここについても、小学生と一緒に活動や見学以外の何かできることがあるのかといったことも、後で議論になればなと感じております。

次が34ページです。これは、子どもの小学校入学に当たって保護者としての心配を尋ねたものです。年少、年中、年長児の母親の回答を並べて示しておりますが、子どもの入学が近づくにつれて増えるのは、真ん中あたりにあります登下校の安全、あとは左のほうにあります新しい生活への移行、あと、授業についていけるか、こうした心配が子どもの年齢が上がるごとに増えています。親の不安は子どもにも伝わりますので、家庭への情報発信などを通して親の不安を軽減することも、子どもを支えるために大切なことだと思います。

また、35ページになります。こちらは幼保小接続の文脈とは直接的にはずれるところがあるのですが、放課後の安全確保を目的として家庭で行ったことを尋ねています。行ったこと、あるいは行う予定があることを尋ねています。年長児の家庭、グレーの棒グラフを見ていただくと、7割ぐらいは、左から3つ目、子どもと通学路を歩いたり、交通機関の利用の仕方を確認したりしています。前のスライドで、入学に向けた心配の中でも登下校の安全というのが最も高い傾向がありました。こうした現実的な親の課題への理解や対応も必要なのかなと感じました。

最後、36ページにはまとめということで、左半分には、私がこれまで話してきた内容として、全国的な動向や今から未来につながる時間軸を意識していくような話の内容があります。その右には、岐阜市の地域の実情として先ほど資料1としてご紹介があったものを載せております。低年齢からの保育利用の増加や子どもが通う園種の多様さ、約8割の公立小学校では10園以上から子どもが入学、こうしたところをいかに幼保小接続でスムーズに連携をしていくかというところの課題になるかなと感じております。

今まで先生方からのお話や事務局からのご報告を聞いている中でも、やはり私立幼稚園を中心とした園種の多様さや1校当たりの接続先の多さ、あるいは乳児期からの保育の質の維持・向上と子どもの育ちの連続性を意識したカリキュラムのあり方、そこで10の姿をどう生かしていくか、あとは家庭ともどう連携をしていくか、そういったあたりがきっと課題になってくるのかなと思いますので、ぜひ委員の先生方のご意見を伺えればと思います。

私からの報告は以上です。ありがとうございました。

○加納（誠）委員長 詳細な報告をありがとうございました。真田委員の伝え方もそうですし、話すスピードもすごく入ってきました。

ここからは委員の皆さんの忌憚のないご意見をお願いします。先ほどの自己紹介は3分程度というお願いでしたから、話し足りなかったことも含めまして、積極的に意見交換をしていきたいと思います。どこからの視点でも構わないと思いますが、どうでしょうか。

春日委員、よろしくお願いします。

○春日委員 現場を預かる身としてもそうですし、小学校にもずっと関わっているのですが、どうしても出てくる問題として、幼保小の連携があると思います。真田委員のご報告にもありましたが、小学校では、幼保小の連携という形で義務化されているので、実際には近隣の幼稚園に1日来て欲しいと声をかけています。それで年長の子どもが来て、小学校1年生と触れ合う、これが幼保小の連携として進んでいるのが事実だと思います。子ども同士の間での触れ合いが幼保小の連携なのか、もちろんそれもあっていいと思うのですが、保育者と教師のプログラミングをうまくつなげていくことが、私は大事だと思います。就園率を見れば、ほぼ義務教育になっていますので、特に教師間の幼保小連携は強めていく必要があります。

例えば、オール岐阜の幼稚園、保育園、認定こども園が、この新しいプランによって、ここまでは幼児期でやっていこうと合意して、その後を小学校でつなげてほしいとするのはどうでしょうか。せっかく園が年長の子どもを送り出しても、小学校1年生でどんと落ちてしまう可能性があります。学校の先生の立場からすれば、いろんな園から来ているので学級全体を見なければなりません。だから、卒園時の姿を、みんなこの辺に合わせていこうと合意することが、プランの役割のような気がします。もちろん、決して小学校までの準備段階にはならない形で考えていく必要はあると思います。

○加納（誠）委員長 春日委員、ありがとうございます。教師間の連携という点に課題があるとのことご提案がありました。また、先ほど杉山委員からは、交流から連携というお話がありまして、僕も、様々な園や小学校と関わらせていただく中で、交流や連携、接続という言葉が同じように使われているという印象を持っていました。僕は、それぞれの主体者

が異なると考えていて、交流は子どもが主体で、連携は教師同士が連携していかないといけませんし、接続は学びや育ちを接続するものと捉えているのですが、その辺はいかがでしょうか。皆様の園、あるいはご家庭などの、それぞれのお立場で気になるところはございますか。

○中島委員 今どうなっているか分かりませんが、私が幼稚園に勤めていた頃は、卒園児を送り出すときに、その頃はまだ地域性がすごく強かったので、一人一人についての家庭背景から様々なことを記入して、一生懸命書いて、小学校に託したつもりだったのです。うちの園に来ていた子どもは、ほぼ2つの小学校に就学していましたので、小学校の先生たちと顔の見える関係性もありましたし、保護者からも、学校に伝えておいてほしいと言われた案件もきちっと書いて、接続のための情報を提供していました。

ですが、新年度の4月に入ってから、結局、学校側で3月末に異動があって、4月に新しい先生が来るなどの事情で、お渡しした資料が4月にどうなっているかが分からず、お問い合わせをもらい、小学校へ飛んでいくということがよくありました。

それと、以前に岐阜市の教育委員をしているときに、教育委員会の会議でも伝えたことがあるのですが、保護者の方からご相談がかかり、幼稚園の先生に、小学校に伝えておいて欲しいと言ったのに小学校が何も聞いていなかったという話で、お母さんから、幼稚園の先生が責められたという話がありました。幼稚園の先生は、ちゃんと書いて伝えたはずなのですが、そのことで信頼関係が損なわれてしまったという話も耳にしたことがあり、うまくいかないかなという話もしたことがあります。

そういったことが、今も現状としてあるならば、その仕組みを考えることも大事だと思います。きっと現場の幼稚園や保育所の先生方は、子どものことを一生懸命書いて、変な言い方ですが、うちの子を託すかのように学校に託します。それを受けとめる小学校側が、年度末の3月に受けとめてくださる先生が、異動して4月にいらっしやらないということも、改善されているのならいいのですが、今現場がどうなっているのか、園長先生方からお聞きできたらというのがあります。

○西川委員 今、教職員同士が話をするというのはすごく大事だと思います。これは他市町で、小学校の先生方が、10の姿をどれだけ知っているかというアンケートを取ったら、その割合が50%だったという調査がありました。その50%は、聞いたことがあるというレ

ベルなのか、10の姿の内容がよく分かっているレベルなのか分かりませんが、1つの現状としてあるなと感じています。今までだったら、例えば幼保小の連絡協議会をやると、幼児教育側はこんなにいい子ですよと言っても、小学校側にはうまく伝わらないことがあります。それは子どもの見方が違うわけで、例えば10の姿でいうと、自立心はあるけど、共同性はないかもしれないといったことです。だから、今回、10の姿という物差しができましたので、それをもとに教職員同士がもっと話し合いをしていただけたらと思います。そうすることで、いい悪いという大まかな見方じゃなくて、子ども一人一人に応じた良さとか課題というものが見えてくるなということを考えています。

それから、私も幼小連携をずっとやっておりますので、交流という段階を超えるというのが第1のフェーズで、今はアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムをどうデザインするかという時代に来ているのですが、私はそれでも古いと思っています。岐阜市で考えていけないといけないのは、幼小連携で考えるときに、接続期だけではなく、0から2歳児の幼小連携や接続を踏まえた保育、それから、3から5歳の幼小連携や接続を踏まえた保育、小学校低・中・高学年と続きます。接続期だけの幼小連携で、アプローチやスタートだけを考えてデザインしてできたと言うのであれば、園や学校全体、校区全体が必死になれません。更に言うと、私は、子どもの育ちを見るために、それぞれの0歳から6年生までの各クラスの保育・授業が充実するために幼小連携をしているのであって、目の前の子どもの幸せを考えないで幼小接続や連携は考えてほしくないなと思います。丁寧に、0歳児で何が必要なのかという長いスパンで見ていく必要があります。この学区で育てたい子どもの姿をそれぞれが持って、子どもの姿を話し合っ、それぞれでどういう保育や授業が必要かを考えてもらえると良いと思います。

○加納（誠）委員長 ありがとうございます。接続期における教師間の理念や方向性なども含めまして、先ほど中島委員から出たそれぞれの園でどのような連携や接続ができていくかというのは、加納委員はいかがでしょうか。

○加納（顯）委員 記憶違いだったら謝りますが、先ほど中島委員がおっしゃったのは指導要録のことで、中島委員が現役だったころは、幼稚園にはあって保育園にはないみたいなお話でしょうか。

○中島委員　そうです。

○加納（顯）委員　その当時、幼稚園の子どもだけ読んでしまうとそっちに目が行って、公平に子どもが見られないから読むのをやめましょうという話になっていたと聞いたことがあります。ですが、今はそうになっていないと思います。保育園も書くようになっていきますので、指導要録をどのように活用してみえるのか、小学校の方で今どのように扱ってみえるか知りたいと思います。

○春日委員　今は、小学校から聞きに来られますね。全部の小学校から。ただ、中島委員が言われるように、先生が異動しちゃいますよね。恐らく、クラス編成の案までは、前の先生がつくっていかれると思いますが。

○加納（顯）委員　確かに見えになりますね。小学校から見えて、個々にいろんな子どもの情報を聞かれます。

○加納（誠）委員長　3月ぐらいですよ。

○加納（顯）委員　そうですね。どういう学級編成にしたらいいですか、といったことも聞かれたことがあります。

○中島委員　小学校が、保育園や幼稚園から上がってきた情報をどのように利用されているかというところでしょうか。

○白木副委員長　前任校のことで、先ほど言いました近隣の多くの幼児教育施設と、且格小学校の場合は10園まではなかったかもしれませんが、特に多数の子どもが入学してくる園へは、夏季休業中と、加えて2月に子どもたちの様子を実際に見に行き、保育士や園長先生などと、子どもたちのよさや保護者の願いや、それから、どのような支援を受けているかといった議題について、そのときの1年生の担任や管理職も含めてお話を聴かせていただいていたと思います。今、ご心配になったように、教員の異動については大体2月ぐらいになると予想がつきますので、異動を想定して、引継がうまくいくように配慮して連携の担当

者や管理職が動いていました。先ほど言われた指導要録については、きちっと封筒に入れて手渡しで持ってみえるので、教務主任がまとめて新しい1年生の担任に資料としてお渡ししました。

私の意見としては、今、保護者の思いや幼稚園の思いと、学校の思いをうまく調整していかなければならないこととして、就学時健診があると思います。就学時健診において、集団調査の中でお声をかけるときに、本当にお声をかけたことだけで心を閉ざされる保護者の方も中にはみえて、難しいなと感じたことも実際のところございました。

○加納（誠）委員長 手厚くやられているというイメージがありますが。

○中島委員 ですが、それは小規模だからできることで、大きな学校ですと、できるかといったらとてもできないと思うので、難しいところですよ。

○白木副委員長 大きな小学校でも、管理職も含め丁寧に聞き取りに行ってみえることは聞いています。

○加納（誠）委員長 そうしますと、情報が上がってくる園に対して小学校は校長先生が中心になって対応しているということですね。

○白木副委員長 はい。それから、他県からの転校などもありますので、管理職が電話をして、何か小学校のほうで配慮することはありますかと電話でお聴きするようになっています。

○中島委員 それは安心ですね。

○春日委員 学校の先生は言いづらいかも知れませんが、私の大学では教え子が教師になっていきますので、やはり学校の先生にしてみたら、幼児期との連携というところにまだ頭が回らない、巷で言われるようにほんとうに忙しいのです。これはこれでまた問題があって、幼小連携が必要だからこっちを向けというのも難しい部分があります。まずは、自分の目の前にいる子をしっかり見てもらうというのが一番だと思います。ただ、この岐阜

の幼児期がどのように小学校を察してやっていくかでしょう。先生方にこうしてくれと言っても、もちろんお願いすることもありますけど、それはやっぱり難しいなと思うので、幼保が何かアプローチしていくというところが恐らく実用的ではないでしょうか。

○加納（誠）委員長 そのほか、どうでしょう。杉山委員はいかがでしょうか。

○杉山委員 やはり一昔、二昔前に比べれば、就学する子どもについての引き継ぎ等は、かなり丁寧になれるようになってきていると思います。小学校から、園に訪問されるということもありますし、園から伺うということもありますので、その辺は変わってきたと思います。以前は、少し困り感を持ったお子さん、支援が必要なお子さんについて情報が欲しいという状況であったと思います。実際にどういう対応をしていったらいいかということだと思うのですが、今言われている幼保小の接続というのはそういったお子さんだけに限らず、どういうふうに幼保小が接続していくかということだと思うので、さらにもう一步深めていけるといいと思います。ですが、小学校の先生は、春日先生がおっしゃったように非常に忙しい。でも、幼稚園の現場も忙しいのです。幼保の現場も忙しいので、そういう中で、ここの接続の部分がやっているといいなと思います。

西川先生がおっしゃっていたようなアプローチカリキュラム、スタートカリキュラムのデザインの時代も遅れているということだと思えます。県も一昨年、接続期のカリキュラムの冊子を作成されましたし、岐阜市も去年作成しました。それぞれが各園で園の実情に合わせたものをつくっていると思います。西川先生がおっしゃったように、ほんとうに0歳から小学校6年生までの、それぞれの段階が充実していることが非常に大事です。私たち、幼児期から小学校へバトンタッチするわけですが、送る側もバトンを受け取る側もきちっと渡さないとだめだし、受け取らないとだめだと思います。だから、幼児の現場ではきっと、それぞれのところをしっかりと充実させた教育・保育をしていれば、教育課程にのってきちっとやっていたら、あえてそこを接続期のカリキュラムと言わなくても、つながっていくのではないかと思います。子どもの発達は、らせん状に行く中で、幼児期と小学校では当然に段差があると思います。環境の違いなど、様々なことがありますので、段差をなくす必要はなくて、違う環境で育ってきた子どもたちをいかに理解していくかという意味で、やはり教員同士の連携が非常に重要なのではないかと思います。

○加納（誠）委員長 ありがとうございます。教師間の連携のあり方に議論が集中していると思いますが、どちらかというと、幼保の先生方のラブコールに小学校の先生がお互い忙しい中でどうつないでいくのか、どういう形にしていくのかだと思います。何かいいお考えや、こういう視点はやっぱり必要だというのがありますか。どうでしょうか。

○西川委員 今度、岐阜市でやる研修会ですけれども、これまで、遊びの中で学びがあると言ってもなかなか見えなかったものが、10の姿として整理されましたので、例えば、子どもが色水を作っているビデオを見て、幼と小の先生が「あっ、ここってこういう姿があるよね」と、そこで確認をして、その確認した遊びの中の力が、小学校の授業でどのように生きるだろうかということを考えてもらおうと思っています。概念的なことではなく、遊びがどのように学びにつながっていくかを話し合ってください予定です。

つまり、最初に出たように、幼と小の先生が同じ物差しで子どもの学びを語っていったときに見えてくるものがあって、それを先生方に意識していただくことが大事です。もちろん、これは幼小の先生だけではなくて、保護者の方や地域の方にも、実は見えない部分なのですが、ここが大事だということを発信していかないと、連携というのは成功しません。ですから、保護者へどのように発信するかも含めて、もっと幼と小の先生が事実に基づいて学びを語り合う必要があって、そのために、今回の改定で出てきた幼児期の終わりまでに育てほしい姿を活用すべきだと思います。

○加納（誠）委員長 そうしないと、小学校の先生もなかなかイメージがつかないですね。

○西川委員 分からないと思います。ですが、小学校の先生はそういう物差しを見てお話しされると素晴らしい力を発揮されますよね。もちろん、幼児教育に携わる先生もそうですが、そのあたりがお互い学び合える場になるのではないのでしょうか。その積み重ねが大事だと思います、今年はその研修を2回、幼小の先生方に行おうと思っています。

○加納（誠）委員長 ありがとうございます。今までの議論を聞いていて、専門性から感じたことについて、大塚委員はいかがでしょうか。

○大塚委員 幼小の接続について、環境が変わるステップがあつて、小学校から頑張るぞという気持ちで臨む子も多くいると思いますので、そこは成長のきっかけとしていいのかなと思います。幼小の情報に関する連携も、私が、1年生の保護者と会う前に、教育相談の担当の先生に、幼稚園のときの情報が何かありますかと聞くと、あつたと思いますと言ってぱっと出てくるので、恐らく情報に関する連携は、できていっているのかなと思っています。劇的ではないとしても、じわじわと歩み寄っている現状だと思っています。

それから、西川委員がおっしゃった幼児期のダイナミックな遊びというのを、小学校の教員が見ると気づきをもたらすのだろうなということも思いましたし、私も見てみたいなと思いました。すごく興味のある研修です。

○加納（顯）委員 幼稚園は、遊びイコール学びということでやっていますが、先生に求められているものは、興味関心をいかに引き出していくかという魔法の言葉です。

それから、それだけじゃなくて、聞く態度を養うために一生懸命やっています。私どもの幼稚園の先生は今、聞く態度をしっかりと教えていて、聞く態度ができていないと活動ができないといった面もあるので、放任という言葉はよくないですし、主体的にという言葉もありますが、やはり聞く態度をどうやって幼児期の中に養っていくかが大事だと考えています。遊びが学びだと言っても、椅子に座って聞くという部分も多くあります。

小学校の1年生のクラスに公私の幼保を合わせて10園以上ということで、それで授業をやるとなると、聞く態度が養われているかどうかは重要なところです。一人一人の子どもの育ちの中で遊びというものを読み取って、さらに興味関心を引くような、そういう言葉で授業をどのように構成していくかというスキルが求められます。以前に私どもの幼稚園で先生をやっていて、今は小学校の先生をやっているという人がいて、その担任クラスだけ非常によく話が聞けるという話を聞いております。

○加納（誠）委員長 小学校の教員経験がある幼稚園教諭ということですか。

○加納（顯）委員 私どもの幼稚園の教諭として何年か勤めて、それから小学校の教諭になりました。その教諭の授業が評判で、子どもたちがよく話を聞くとか、テストをやると、そのクラスだけ平均よりも10点ぐらい良いとの話です。その教諭が何をやっていたのかというと、聞く態度というものを、絵本の読み聞かせを通じて養ったとのこと。遊びか

ら学びという観点で、興味関心を持たせながら聞く態度を養うために、絵本を活用したという事例です。

○加納（誠）委員長 ありがとうございます。鈴木委員はいかがでしょう。

○鈴木委員 春日委員が、幼稚園や保育園が小学校の準備にはならないようにとおっしゃられたことがすごく印象的でした。小学校への接続という趣旨で、子どもたちがスムーズに上がるために、園で座って小学校のように先生の話聞いて、平仮名を書けるようになるということが、接続になってほしくないなという思いがすごくあります。

幼児期にしかできない経験をすることが、小学校の学びにつながるということが10の姿にあると思います。幼児期に遊び込む、遊び切るという姿が、小学校の先生から見て、ただ遊んでいると見られてしまっただけでは接続にならないと思います。どれだけのことを子どもが遊びの中で学び、それが後の学びにどのようにつながっていくのかを、小学校の先生に理解していただくとともに、幼児期の施設は、小学校への準備としてやるのではなく、10の姿を大切にしながら、幼児期に何が必要か、今の子どもたちにどのような幼児教育が必要なのかをそれぞれが理解していけば、うまくつながっていくと思います。

頂いた資料の中に、小学校の先生と幼稚園や保育園の先生が交流をされたというものがあって読ませていただきました。私も、実は美濃加茂で2園しかない私立の園で幼稚園教諭をしていたのですが、そのときから幼小交流がすごく課題になっていて、私たちもどうしたらいいのか考えていました。2園しかないので、いろんな学校に行きますし、手探りで始めて、子どもたちが最も多く就学する小学校とつながりを持ってやっていました。そのときに、今の岐阜市がやっている、小学校の先生と幼稚園や保育園の先生が交流する場があったら、もっともっとうまく接続ができるということを感じましたし、もっと岐阜市が発信して広がっていくと良いと思います。

○加納（誠）委員長 ありがとうございます。

○春日委員 私も、いくつかの市町の幼児教育について助言させていただいているのですが、例えば、園によって遊びの捉え方も違ったり、遊びの時間も質も違います。研修会をやるときには、ぱっと遊びの場面を出しますが、では、平素はどうかといったときに、やは

り、子どもがけがをすることが怖いので、運動遊びに関して、群れて遊ぶということを毎日されているかといったら、意外にされていなのです。

これは園の類型云々ではなくて、都会的な箱の中だけの園というのは幸いなことに岐阜にはあまりないので良いのですが、園によっても園長先生の考え方などによって、けがをさせちゃいけないということが本当にあるのです。家庭教育という点でも、長子の1年目は保護者としても1年目なので、集団生活ってこういうものだという理解も大事です。私はよく、少々のけがというのは大事だよと言っています。少々のけがをさせないと、もっとリスクがあるということを学べないのです。大変ですが、こうした価値観を、少しずつ、でもしっかりと情報発信していくことは大切です。

○加納（誠）委員長 考え方も様々ですからね。

○春日委員 そうです。だから、その考え方の参考になる情報を保護者にもしっかりと伝えて小学校へ送り出してあげないと、学校も大変な部分があるだろうと思います。

○西川委員 遊びの質を担保するために、例えば、遊び込む経験について6つに定義されていますよね。解説書の29ページに、幼児期の教育における見方・考え方が明記されていますが、それらを基盤にしないと、遊びがぶれて、学びがぶれてしまいます。文字や数字が書けることが学びではないので、遊び込むというのはどういうことかを確認しながら、準拠しながら進めていけたらと思います。

○加納（誠）委員長 見方・考え方を基盤にしながら広げていきたいですね。今回、そういったことが明記されましたからね。

○西川委員 明記されているので、そこがぶれてしまってはいけません。学びが何かというと、机と椅子に座れることだとすると全然違います。ベネッセの研究にも素晴らしいものがありますので、それを教えていただきながらやっていけば良いと思います。

○加納（誠）委員長 議論がますます白熱していますが、真田委員はいかがでしょうか。

○真田委員 今回の、幼稚園教育要領、保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を見て、この前の改定は、小学校との接続を見越した上での改定になっておりますので、その内容を生かしていく必要があります。先ほど西川委員からもありましたように、乳児期からの接続について、保育所保育指針等でも、乳児の3つの自立という視点が明確に示されていて、それが5領域につながり、10の姿につながり、そして、3つの資質・能力につながるという連続性があります。それらを生かしながら、子どもたちの育ちを支えていく必要があります。あとは、先ほどからお話に出ていましたように、幼保小だけでなく、家庭との連携ということと、あとは遊びの質というのを深めていくに当たっては、幼児教育課の3つ目の柱の実践研究といったあたりもうまく生かしながらやっていけると良いと思いました。

あとは、幼保小接続と言っても、幼保が小に合わせるとか、小が幼保に合わせるとか、どちらかがどちらかに合わせるということではないとも思いましたので、幼保側は小学校教育を理解し、小学校側は幼保を理解しという中で、お互いに学び合って接続の道筋を考えていけるといいのかなということも感じました。

○加納（誠）委員長 真田委員が後者で言ったことは、僕が幼少連携の研究をし始めたときに、お互いの形成がすごく大事になってくると思ったことにつながります。

本日は、活発に意見が出まして、最後に論点を整理してくれという宿題もあったのですが、まずは連携のあり方を探っていかなければいけないので、大人ファーストにならず、いかに子どもファーストにしていくかでしょう。そのためには子ども理解が必要だということですね。

話を聞いていると、教育に困った子を何とかしたいという小学校側の考えもあるのですが、一方では、真田委員から報告があった、子どもの良さや得意なところも見つけていけるような接続も必要だと思います。そういった点では、これから西川委員がやっていただく研修プログラムは、とても効果的だろうと思っています。先生同士が膝を突き合わせて話し合うことも大事ですし、例えば、僕も経験があるのですが、やはり幼児の保育の姿を、子どもを見てほしいという部分が大きいです。それはビデオなどで間接的にでも効果的ですし、できれば実際の姿を見てほしいと思います。子ども理解ができていれば、スタートカリキュラムは要らないと言っている先生もいらっしゃるのです、僕も大変賛同します。

これも自分の経験になってしまいますが、たまたま最初に勤めた小学校でお花見の会と

いう集まりがあつて、その小学校区の園の先生方を呼んで交流しました。ご飯を食べたり、カラオケに行ったり、ボウリングに行ったり、そのカラオケの待ち時間や、ボウリングで投げる前に様々な情報交換ができました。そのときに交流した先生方が、今では園長先生になられて、研究の際や、学生を連れていった際に教えていただいています。考えたら、あれが連携の第一歩だったと思っています。

今年、愛知教育大学附属名古屋小学校の生活科の公開が5月28日にありました。5月28日公開ですと、10月からどのような授業をしようか話し合います。附属名古屋小学校と附属幼稚園は隣同士ですが、でも、今まであまり交流がなかったのです。だから、1・2年生の先生にとにかく行こうと声をかけて、2月に行き始めて、結果3回しか行けなかったのですが、全然違いました。学校での話し合いに、2週間に1度ぐらい僕が行くのですが、先生たちも交えて幼稚園でやるようになりました。そのまま、幼稚園の年長の子どもが1年生、1年生の子が2年生になってという接続カリキュラムにチャレンジして、いまだに続いています。やればうまくいくのかなと思っているので、いかにこの委員として発信していこうかを考えながら聞かせていただきました。まとめ役がうまくいかなくて、まとまっていませんけれども、時間も近づいておりますし、事務局にお返ししたいと思います。

○事務局 ありがとうございます。本日の議事録ですが、後日、岐阜市の公式ウェブサイトにて公開を予定しております。次回の会議は、10月4日を予定しております。それまでに、ヒアリング等もさせていただきながら進めていきたいと思っております。これをもちまして、第1回会議を閉会しますが、何か連絡事項がございます方、お見えでしょうか。

○中島委員 冒頭にお配りした資料ですが、地域の方々が地域の子どもたちを支えるというのがファミリー・サポート・センターの特徴です。子どもの育ちには、地域の方というのも大きな役割を果たしていきます。ぜひそちらの話も次回、次々回にできたらと思っておりますので、お願いします。

○事務局 ありがとうございます。それでは、長い時間ありがとうございました。これにて閉会させていただきます。ありがとうございました。

(20時00分閉会)